

■ 書 評 ■

竹内 洋

『日本のメリトクラシー—構造と心性—』

武庫川女子大学 新堀 通也

受験, 就職, 昇進など生涯継続する競争と選抜, その結果としての成功と失敗, 勝者と敗者の出現, それをもたらす影響とその処理——日本ならずとも, あらゆる近代社会において, 個人のキャリアと組織の命運を左右するこうした現象は, 最も身近で痛切な問題である。

競争と選抜の原理, タテマエとして近代社会が採用してきたのはメリトクラシーだが, 本書の著者はその「日本的」な特質に迫ろうとした。著者は「選抜システム刻印論」にそれを求め, 「傾斜的選抜システム」, あるいは「シャッフリング型選抜システム」という選抜システム自体が, 「日本的」ともいえる「マス競争社会」「大衆的競争のたきつけ」を生み出し, つぎつぎに現われる目先の競争での成功を志向する個人, すなわち職場が求める適応人間あるいはサラリーマン型人間を大量に再生産するのだと主張する。しかもその選抜基準は欧米におけるような階級文化ではなくて, 「人物」「日本人らしさ」という国民文化であるところに, 競争のマス化を促す原因があるという。

こうした問題提起と結論は, 特にわれわれ教育社会学者にとって魅力的, 刺激的である。事実, 競争, 選抜, メリトクラシーなどは教育社会学 (あるいは社会

学, 労働経済学など) にとって, なかでも「学歴主義」の支配する日本の教育社会学にとって, 好んで取り上げられてきた問題である。

著者はこの問題を取り上げるに当たって一方では欧米における主要理論を批判的に, また年代順に巧みに整理する。それが本書の第1部(「分析視角」)である。この第1部, なかでも第1章(「伝統的アプローチ」)では年代順に, パーソンズを代表とする機能理論, 次にシグナル理論, フィルター理論, 訓練費用理論などのスクリーニング理論, つづいてコリンズを代表とする葛藤理論, さらにブルデューを代表とする社会的再生産理論あるいは文化資本論, そして「新しい教育社会学」における解釈理論が取り上げられる。そして, それぞれが時代の背景, なかでも技術革新と経済成長という, 個人の能力を受け入れ発揮させる労働市場, 需給関係の変化を受けて出現したことが説明されている。

この第1部第1章はすでに1992年に, 著者を編者の1人とするテキスト『教育社会学』(有斐閣)で「教育と選抜」というタイトルのもと発表され, この主題だけにとどまらず, 欧米の教育社会学の最近の潮流を知るのに格好のものである。

これにつづく第1部第2章(「ニュー

・アプローチ—増幅効果論と冷却論—」は、以上の「伝統理論」では解釈しきれず、また扱われなかった現象、つまり選抜は何回も行われるという事実、また選抜の敗者になぜ逸脱や抵抗が起こらないかという疑問が不問に付されているという不満、死角に応える新しい理論として、ローゼンバウムの「トーナメント移動」、ゴフマンやバートン・クラークの「冷却理論」などが好意的に詳論される。この章は昭和62・63年度文部省科研の報告書を再録したものであり、多くの人々にとっては初見であろうから、それだけでもこうして広く手にすることになったことはありがたい。

以上、第1部の理論編を下敷きにしながら、第2部（「経験的分析」）では、これら理論の検証と、「日本的」メリトクラシーの発見とを目指した大規模な調査研究の結果と解釈が報告される。受験、就職、選抜がいかに行われるかを、高校や企業をその「格」や「ランク」などによって層化し、「傾斜的選抜システム」という角度から分析し、そのシステムによって個人の野心の加熱と冷却とがいかに行われるかが明らかにされる。

単に表面的な調査報告ではなく、制度と意識とを関係づけ、メリトクラシーの「日本的」特徴を浮きぼりにしたという点で、こうした実証研究のモデルとして評価できる。ただ恐らく一般の読者には、その結論、すなわち「日本的」特徴は興味深くもあり、納得させられる点多いだろうが、その論の展開や用いられ

る用語は難解すぎて、ついていけない人が少なくないだろう。しかし教育社会学者や社会学者にとって、本書が最近の大きな収穫であり、また教えられるところが多いことは疑いない。

評者の感想をいくつか述べたい。市場の需給関係がメリトクラシーの実現に大きく影響することは指摘されているとおりだが、最近のようにリストラ、就職難の時代、どこでもよいから就職先や再就職先を見つけること、クビにならないことが、多くの人にとって、例えば新卒、女子、中高年齢者にとって、最大の関心となる。こうした時代のメリトクラシーは、別の問題を提起するのではないか、と思われる。

もう一つ、日本の競争は個人ではなく家族ぐるみ、出身校ぐるみで行われ、個人は代表選手、その所属集団は応援団たるの趣きがある。こうした特徴に着目するのも面白いのではないか、という気がする。

またスポーツはメリトクラシーが最も徹底している活動分野である。そして日本的スポーツにおける段、入門、部屋などの制度を見ることによって、日本的メリトクラシーの特徴が鮮明になるのではないか。特にスポーツは芸能と並んで、若者のあこがれの職業となっていることを思えば、その感が深い。

以上のような角度からの研究を著者とはいわず、誰かに期待したいと思った。

◆A5判 270頁、4326円
東京大学出版会